

日本人の自然観と自然保護

越川 正

戦後の高度経済成長と技術革新によって、山を崩し木を切って無秩序な開発が進められ、国土の自然破壊が巨大化しつつある現在、森林を守り環境を保護することは一般的には誰も反対はしないだろう。しかし、問題となる開発地域の関係者は『経済効率を全く無視する訳にはいかない』という。経済効率か自然保護かという論争はいつも平行線に終わる。そのような現在の日本人の考えの中には機能主義と価値観の多様性などによって自己分裂的な考え方がある。『日本人の生きがい』（宮城音弥）の著書の中に『追求人（同時に義務人）は、経済・宗教・芸術・政治において目標を作って、これに向かって前進する。追求人の種類はさまざまあるが、それを二つの型に大別することができる。（A）理想主義型（イデアリスト型）と（B）自己主義型（エゴイスト型）である。理想主義型の人自己を顧みずに生きがいたる理想を追求する。これに対して自己主義型は自分を押し出し、そのうちでも自分の利益になる物事を生きがいとして追求するエゴイスト（利己主義者）が多い。理想主義と自己主義は全く異なったものようであるが、ともに情熱（パッション）つまり持続的な感情傾向を示し、自分の考えを通そうとする自我肥大の傾向を持つ点で共通しているし、同じ性格の違った姿だといってもよい』と書いている。利益になる物事に生きがいを感じている多くの日本人は、会社・個人の利益を中心に機能主義的ケースバイケースでことにあたる。今の日本人の体質なのか？自己主義型社会優先の流れが幅をきかせ、自然破壊を巨大化し急速化しつつある今日、自然保護を唱えるわれわれは、開発の後から悲鳴をあげているような状況がそこにある。このまま自己主義的な考え方で自然を破壊してもよいのか。私たちはこのような状況に対してどのように考えたらよいのだろうか。

多くの人が自己主義的生き方になりやすい現代の風潮を一度根本的に問い直して見る必要があるだろう。日本人の心の原点までさかのぼって、私たちの祖先は一体どのように自然を見つめ、それを感じていたのだろうか。古典文学・歴史書・宗教思想・古典芸術など、私を感じた本の中から抜き出したものや、日本人の自然観に関して感じたことを折り込んで述べてみたい。

【神社は自然崇拜】

神社は日本人の自然崇拜・森崇拜と深くかかわっていると思う。今でも都市の中にただ一つ残っている森は神社である場合が多い。山の小高いところに岩がある。その岩は神様が下りてくるところで、岩と木が御神体になっている。その岩はある意味で天と地の接点で、その岩にはだいたい生命のシンボルとしての木が生えている。その巨木が人間の生のイメージなのである。古代人は人間というものを理解するときに、天と地の大きな接点にある一つの巨木として理解していたのであろう。その岩というのは永遠なものを表し、木は生々としたものを表す。だから、神道の中には、形而上学（けいじじょうがく）（人間がつくり出した様々なものの本質、存在の根本原理を論理的に考えや直観によって研究する学問）がある。これが本当は神道の意味なのである。根元はやはり、『人間は自然の中にしか生きられない』ということ。古代の日本人は知っていたのだと思われる。

【最澄思想】

最澄は自然が好きであった。もともと人間に対して抵抗感をもっていた。最澄の思想も自然に関係があったと思う。つまり『山川草木悉皆成仏』という思想である。すべてのものに仏性がある。すべての人間に仏性がある。全部仏になれる。けれど人間ばかりでなくて、生きとし生けるものは、すべて仏性がある。それは、すべて成仏できる、という思想が最澄にあるように思われる。その思想が後に発展して『天台本覚論』という思想になる。“山や川や草や木もみんな成仏できるのだという考え方がある。だから、そのような考え方は、人間だけがこの世界の中で特権をもっているというのではなく、人間も動・植物もさらに、山や川までも命が一つにずつつながっているのが仏だ”という考え方である。私は、最澄思想の展開だと思うが、なぜこのような考え方が生まれてきたのであろうか。

日本では縄文時代から、あの貝塚というものが何であるのか分からなかった。今までは貝のゴミ捨て場ではなかったか、という説が有力であったが、

どうも違うようで、きちんと葬られた跡があって、そして貝塚とっているから、貝の墓だということである。恐らく『山川草木悉皆成仏』の近い考え方ではないかと思われる。つまり、生きとし生きるものすべて同じ魂が流れている。貝も木も人間も同じ魂だ、たまたま人間の世界に“おみやげ”をもって、ここへ来た客人なのだ。その客人の魂をここへ葬って、そしてあの世へ返そう。“人間も動・植物も一切同じ魂が流れていて、その魂は無限の循環を続けて

いる”という考え方なのである。そのような考え方が基礎になって、そして『山川草木悉皆成仏』という考え方ができた。私はこのような考え方は素晴らしいと思う。古代の日本人や最澄の日本仏教の中の考え方の中心にこのような思想があるとは分らなかった。これは、特に宗教的な考えでなく、日本人の心の根底に流れるものであろう。純粋な気持ちで、動・植物に接してもらいたいものである。

(越川造園コンサルタント)



「危急種」と判定されたオニバス(写真上)もオニバス(写真下)も絶滅の危機にある

野生植物 危機くつきり

36種すでに絶滅、「寸前」も148種

保護団体、530種を調査

調査は、国際的な植物保護で進められているが、このうち動植物に匹敵して調査団体が三団体の十一個で、絶滅し、十四種は既に絶滅した。対象は、日本、現存不明、三箇所は絶滅が危惧される野生植物のシダをはじめ、裸子植物、被子植物、植物愛好家や自然保護グループ、保護団体などへのアンケートや聞き取り調査を、カササギやオニバスのほかに現地調査も、「危急種」を別に分けた。

「危急種」は三十九種、絶滅した種は三十八種、絶滅寸前という「絶滅危惧種」が百四十八種、絶滅危惧種にある「危急種」が六百七十六種に上った。また、生息状況が不明な「現存不明」が三十九種あった。

この中で、本州、四国、九州に広く分布していたシバカマは、「絶滅危惧種」とされた。かつては関東平野や大阪平野などの河川敷に普通に生え、全国二十七都府県、七十の産地

「危急種」と判定されたオニバス(写真上)もオニバス(写真下)も絶滅の危機にある

「危急種」と判定されたオニバス(写真上)もオニバス(写真下)も絶滅の危機にある

日本の野生植物約五千三百種について日本自然保護協会と世界自然保護基金日本委員会が実施した初の全国調査の結果、全体の二七%に当たる八百九十九種が絶滅、もしくは絶滅の危機にあると、二十六日の発表であった。この中には、百四十種の被子植物をはじめ、秋の七草に数えられるシバカマや、昔から親しまれてきたオニバス、オニバスなども含まれている。危機にひんしている理由は、開発行為による生息地の破壊や、山草業者の採取による乱獲が目立った。こうした結果を受けて、調査団は、リストアップされた植物種についての採集や販売を禁じる法的措置を求める開発にあたって、自身の有無の調査を義務づけること、など提言している。

[新潟県自然保護団体の会報]

新潟県自然観察指導員連絡協議会(事務局 〒946 長岡市摂田屋 5-10-1 郡司哲三方)

新潟県自然観察指導員連絡協議会会報 No.26号(1989年6月15日 発行) No.27号(1989年7月31日 発行)

植物同好じねんじょ会(事務局 〒947 新潟県小千谷市山寺 関省吾方)

じねんじょ 13(1988年12月発行)、むかご 7巻3号(1989年1月15日発行)

菅名岳の自然を守る会(事務局 〒959-16 新潟県五泉市大字太田1094番地1 五泉市環境課)

菅名岳だより No.5(1989年7月10日 発行)

東蒲自然同好会(事務局 〒959-44 新潟県東蒲原郡津川町横町 斎藤久夫方)

四季のつどい No.15(1989年3月発行)

山のともだち(事務局 〒950-21 新潟市坂井砂山2-3-14)

自然家族 No.5(1989年6月発行)

[お知らせ]

「新潟県植物保護」No.7 原稿募集 1月発刊の予定ですので投稿をお願いします。

「新潟県植物保護協会」1989年会費未納の方納入をお願いします(一口 ¥1,000)。